The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『とはずがたり』の「墨染めの袂」：後半部における二条の着衣描写について
Author(s)	高嶋, 藍
Citation	語文. 2007, 89, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『とはずがたり』の「墨染めの袂」

――後半部における二条の着衣描写について――

高嶋　藍

はじめに

『とはずがたり』は装束描写の多い作品である。その点についてはとみに指摘があり、様々な興味深い御論考が存在する。[1] 中でも「小夜衣」という歌語が唱和されていることを指摘された岩佐美代子氏の御論[2]は、『とはずがたり』に描かれる装束が作品全体の構成に関わっていることを示す有効な証左と視座を提供している。

出家の身となって再会した石清水で、院の小袖三つを賜った作者は、

　重ねしも昔になりぬ恋衣今は涙に墨染の袖

の感慨に沈むが、それすら経供養の布施にと熱田・松山で一領ずつ手放し、「いかならむ世までも」と「ことさら残し持ちまゐらせ」た「御肌なりし」最後の一領を、院の崩後「いつまでかは」と那智に奉納する時、あたかも院の初夜詠〔あまた年さすがに馴れしさ夜衣重ねぬ袖に残る移り香　引用者注〕に唱和するかのように、

　あまた年馴れし形見のさ夜衣今日を限りと見るぞ悲しき

と詠じて「衣」をめぐる愛執の半生のとじめとするのである。「小夜衣」という歌語が、巻一と巻五であたかも唱和するかのように使用されることを指摘されたこの御論は看過できない重要な御論であろう。

かつて拙稿[3]において、前半部における女性の装束描写と、そこに東二条院の書状が与える影響とに注目しながら「作者は、装束描写の担う役割を意識的に変化させることによって二条のおかれている立場を示している」[4]と論じた。しかし、岩佐氏の御論考を参照すれば装束描写は作品全体の構成に関わっているものであり、前半部の考察のみでは不十分である。後半部においても装束描写が構成に関わっていることは充分に考えられるだろう。

そこで本稿では、旧稿において考察の対象外とした作品後半部

を中心に装束描写が担う役割について考察していくことを目的とする。

ただし、後半部では二条はすでに出家しているため、その着衣は尼衣である。「装束」とは称し難い尼衣と女房装束をまとめて考察する便宜上、本稿においては「着衣」という語を用いて論じることとする。

一、記される着衣の変化

拙稿[5]では、『とはずがたり』前半部において作者は他の女性の着衣を描く際には必ず二条の着衣を並記することにより二条の着衣の他の女房の着衣に対する優位性を示すと述べたが、後半部ではそのような特徴は見ることができない[6]。

そこで、後半部における着衣描写の特徴を探るべく、後半部で記述される二条の着衣について、左に表として示した。

表1　後半部における二条の着衣

場所	二条の着衣
逢坂の関	慣らはぬ旅の装ひ
赤坂の宿	**墨染めの色にはあらぬ袖**
江の島	はる〴〵来ぬる旅衣
石清水での再会	苔の袂 苔の衣 **墨染めの袂** 御形見の御小袖を**墨染めの衣**の下に重ぬる **墨染めの袖**
伊勢神宮	**墨染めの袂** 賜はりたりし御小袖を上に着て **墨染めの袂** その御姿ははゞかり申せども おなじ**袂の墨染め** はゞかる姿
伏見での一夜	ことやうなる姿
後深草院御病	**墨染の袂**
後深草院御葬送	女房の衣を被きて **墨染の袖**
後深草院三回忌	**墨染の袂**

太字で示したように、「墨染め」の語が多く見られる。なかでも、「墨染めの袂」という表現が多いことに注意したい。

後半部では、冒頭でまず「慣らはぬ旅の装ひ」として二条の旅姿が記され[7]、次いで赤坂の宿の場面で初めて尼姿について言及される。

二人ある遊女の姉とおぼしきが、いみじく物思ふさまにて、琵琶の撥にてまぎらかせども、涙がちなるも、身のたぐひにおぼえて目とゞまるに、これもまた、墨染めの色にはあらぬ袖の涙をあやしく思ひにけるにや、盃据へたる小折敷に書きて、差しをこせたる　（巻四　170頁）

しかし、江の島で旅姿について再度記述された後は、二条の着衣は石清水八幡宮における後深草院との再会で、やつれた姿であることを表す「苔の袂」「苔の衣」として描かれるまで記されな

い。

一年、今はと思捨てし折、京極殿の局より参りたりしをこそ、この世の限りとは思ひしに、苔の袂、苔の衣、霜、雪、霰にしほれ果てたる身のありさまは、たれかは見知らんと思ひつるに　（巻四　194頁）

また、赤坂の宿からこの場面までは、二条の着衣が「墨染め」であることを記す記述が見られないことも確認しておきたい。

ところが、この再会以降は二条の着衣が「墨染め」であることを示す例が顕著になる。

「さらばよ」とて引き立てさせをはしましぬる御名残は、御跡なつかしく匂ひ、近きほどの御移り香も、墨染めの袂にとゞまりぬる心地して、人目あやしく目立たしければ、御形見の御小袖を墨染めの衣の下に重ぬるも、便なく悲しき物から、

重ねしも昔になりぬ恋衣いまは涙に墨染めの袖　（巻四　195頁）

これは石清水八幡宮で再会を果たした翌朝に後深草院が二条に自身の小袖を与える場面であり、二条の「墨染め」の着衣が三度記される。しかし、この再会以降は二条の旅姿については全く言及されず、ただ「墨染め」が強調されるのみである。

更に、この再会以降九例見られる「墨染め」のうち、「墨染めの衣」とされる一例と和歌の中で使用される「墨染めの袖」二例を除き、残りの六例全てが「墨染めの袂」という表現になっている。八音の「墨染めの袂」より七音の「墨染めの袖」の方が和歌には適していたので和歌の中では「袖」という表現がとられたのだと考えると、後深草院との再会以降は「墨染めの袂」という表現が二条の着衣表現の中心になったと指摘できる。

その理由としては、次に挙げる後深草院の言葉の影響があると考えられるだろう。

御宮巡りをまれ、今一度よそながら見まいらせんと思ひて、墨染めの袂は御覧じもぞつけらるゝと思ひて、賜はりたりし御小袖を上に着て、女房の中に混じりて見まいらするに、御裘代の姿も昔には変はりたるも、あはれにおぼえさせをはしますに、階昇らせおはしますとては、資高の中納言、侍従の宰相と申し頃にや、御手を引きまいらせて、入らせおはします。「おなじ袂、なつかしく」など、さま〴〵うけたまはりて、いはけなかりし世の事まで、数〳〵仰せありつるさへ、さながら耳の底にとゞまり　（巻四　196頁）

波線を付したように後深草院の「おなじ袂、なつかしく」という言葉が見られる。後深草院のこの言葉を受けて、作者は再会以降の二条の着衣を後深草院と「おなじ袂」である「墨染めの袂」だと記すのだと考えられよう。

では、この「墨染めの袂」は作品内でどのような役割を担うのであろうか。そのことについては次章以降で考察を試みる。しかし、「墨染めの袂」は後深草院と同じであるということを強調するために描かれる着衣であるため、後深草院崩御の前後では役割

が変化している可能性も十分に考えられる。そこで、本稿では後深草院崩御以前と以後に分けて論じることとする。

二、「墨染めの袂」の担う役割

二―一、後深草院崩御以前

石清水八幡宮での再会以降、二条の着衣が最初に「墨染めの袂」として描かれるのは伊勢神宮においてである。

神館といふ所に、一二の禰宜より、宮人ども伺候したる。墨染めの袂ははゞかりある事と聞けば、いづくにて、いかにと参るべき事とも知らねば、「二の御鳥居、御庭所といふ辺までは苦しからじ」と言ふ。所のさま、いと神〴〵しげなり。館の辺にたゝずみたるに、男二三人、宮人とおぼしくて、出で来て、「いづくよりぞ」と尋ぬ。「都の方より結縁しに参りたる」と言へば、「うちまかせては、その御姿ははゞかり申せども、くたびれ給たる気色も、神も許し給らん」とて、内へ入て、やう〴〵にもてなして、「しるべしたてまつるべし。宮の内へはかなふまじければ、よそより」など言ふ

（巻四　198頁）

傍線を付した箇所に見られるように、二条は一度は「墨染めの袂」であることが「はゞかり」となり参拝を躊躇するものの、「その御姿ははゞかり申せども」との宮人の言葉を受けて、最終的には二の鳥居の中へ入ることを許可されるのである。

こうした「墨染めの袂」を契機として〈一度は拒まれるものの、最終的には許可される〉という構造はこれ以降も用いられる。

暮るゝほどに、それ近く観音堂と申て、尼の行なひたる所へまかりて、宿を借れば、「かなはじ」とかたく申て、情けなく追い出で侍しかば、

世を厭ふおなじ袂の墨染めをいかなる色と思ひ捨つらん

前なる南天竺の枝を折りて、四手に書きてつかはし侍しかば、返しなどはせで、宿を貸して、それより知る人になりて侍き

（巻四　200頁）

これは伊勢神宮の観音堂で二条が尼に宿を頼む場面であるが、初めは「かなはじ」と宿泊を拒んだ尼も「おなじ袂の墨染め」とする二条の歌によりそれを許可する。後深草院と「おなじ袂」である「墨染めの袂」が、この場面では尼とも「おなじ袂」と記され、その結果二条は一度は拒まれた宿泊を受け入れられるという構造になる。

後深草院の御病の場面にも「墨染めの袂」は記される。

又、御病ひの御やうもうけ給など思ひつゞけて、西園寺へまかりて、「昔、御所ざまに侍し者なり。ちと見参に入り侍らん」と案内すれば、墨染の袂を嫌ふにや、きと申入る人もなし。せめての事に、文を書きて持たりしを、「見参に入よ」と言ふだにも、きとは取り上ぐる人もなし。夜更くる程になりて、春王といふ侍一人出来て、文取り上げぬ。「年の積もりにや、きともおぼえ侍らず。明後日ばかり、かならず立ち寄れ」と仰せらる

（巻五　225頁）

西園寺実兼のもとに参上した二条は、「墨染の袂を嫌ふにや、きと申入る人もなし」「きとは取り上ぐる人もなし」と、墨染めの袂によって一度は実兼に会うことを拒まれる。しかし、やはり最終的には「明後日ばかり、かならず立ち寄れ」との言葉により受け入れられる。この場面も先の二例と同じ構造である。

次に、「墨染めの袂」を重ねる順からも役割を考察する。石清水八幡宮での再会の翌朝、二条は「墨染めの袂」の下に「御小袖」を着用するが、その際、後深草院と再度会うことへの期待とそれが叶わぬ悲嘆とが記される。

「さらばよ」とて引き立てさせをはしましぬる御名残は、御跡なつかしく匂ひ、近きほどの御移り香も、墨染めの袂にとゞまりぬる心地して、人目あやしく目立たしければ、御形見の御小袖を墨染めの衣の下に重ぬるも、便なく悲しき物から、

重ねしも昔になりぬ恋衣いまは涙に墨染めの袖

むなしく残る御面影を、袖の涙に残して立ち侍も、夢に夢見る心地して、今日ばかりも候て、今一度も、のどかなる御ついでもやなど思ひまいらせながら、「憂き面影も、思ひ寄らずながらは、力なき身の誤りともおぼしめされぬべし。余りにうちつけにとゞまりて、又の御言の葉を待ちまいらせ顔ならんも、思ふ所なきにもなりぬべし」など、心に心をいましめて、都へ出づる心の中、さながら推し量るべし

（巻四　195頁）

先の三例と同じく二条の望みはまず拒まれるが、構造上、本来ならば「墨染めの袂」の効力によりその望みが叶えられるはずではないか。しかし、二条は「墨染めの袂」の上に「御小袖」を着用するのである。この場面の直後にも、再び「御小袖」の下に「墨染めの袂」を着用する場面が見られる。

御宮巡りをまれ、今一度よそながら見まいらせんと思ひて、墨染めの袂は御覧じもぞつけらるゝと思ひて、賜はりたりし御小袖を上に着て、女房の中に混じりて見まいらするに

（巻四　196頁）

これらの場面では他と異なり、二条の後深草院との再会への望みは拒まれ続ける。着衣の最上層に「御小袖」を置くことにより「墨染めの袂」は隠されて、その効力は抑えられたかの如く、二条の当初の望みは叶えられることはない。

以上見てきたように、後深草院崩御以前では後深草院と「おなじ袂」である「墨染めの袂」が着衣の最上層に位置し視覚的に示される時、その「墨染めの袂」が効力を発揮して、二条の望みを一度は拒みながらも結局は受け入れるという役割を担うことが明らかになったと思う。次章では後深草院崩御以後の「墨染めの袂」について考察したい。

二―二、後深草院崩御以後

後深草院崩御以後に「墨染め」が記されるのは葬送直後と三回忌の記事の二例のみであるが、その二例について以下に考察する。

まず一例目の葬送後の場面だが、「墨染めの袖」という表現が

とられており「袂」ではない。しかし一章で述べた通り、和歌の中に織り込むために特例的に七音の「墨染めの袖」の形をとったと考えれば、この場合の「袖」と「袂」とを同列に論じることに差し支えはないだろう。

御素服召さるゝよしうけたまはりしかば、昔ながらならましかば、いかに深く染めまし。後嵯峨院御隠れの折は、御所に奉公せし頃なりし上、故大納言、「思ふやうありて」とて、御素服の中に申入れしを、「いまだ幼きに、大方の栄へなき色にてあれかし」などまでうけたまはりしに、そのやがて八月に、私の色を着て侍しなど、数〳〵思ひ出でられて、

墨染の袖は染むべき色ぞなき思ひは一つ思ひなれども

（巻五　230頁）

この歌は、後深草院の崩御にあたって素服の着用が叶わぬことを嘆く歌である。崩御以前はこの「墨染め」が二条の望みを最終的には叶える役割を果たしていたのに対し、この場面では望みは叶えられない。このことから、後深草院崩御後は「墨染めの袂」の効力が消失したのではないかと推測される。

次に、後深草院三回忌の記述を引用して考察を進める。

かねてより、院御幸もならせおはしまして、ことに厳しく庭も上も、雑人払はれしかば、「墨染の袂はことに忌む也」といさめらるゝも悲しけれど、とかくうかがひて、雨垂りの石の辺にて聴聞するにも、昔ながらの身ならましかばと、厭ひ捨てしいにしへさへ恋しきに、御願文終はるより、説法すでに終はるまで、すべて涙は、えとゞめ侍らざりしかば、そばに事よろしき僧の侍しが、「いかなる人にて、かくまで嘆き給ぞ」と申しも、亡き御蔭の跡までも、はゞかりある心地して、「親にて侍し者にをくれて、この程忌み明きて侍ほどに、ことにあはれに思ひまいらせて」など申なして、立ち退き侍ぬ

（巻五　247頁）

この場面でも「墨染の袂」は「ことに忌む也」といさめられたままであり、二条は自分の悲しみを後深草院ゆえのものであると語ることもできず立ち退く。後深草院崩御以後に「墨染めの袂」の効力が消失することは、ここからも確認できる。

では、後深草院崩御後に二条の望みはどのように描かれるのだろうか。それを考察するために院の葬送に関する記述を挙げる。

「御棺を、遠なりとも、今一度見せ給へ」と申しかども、かなひがたきよし申しかば、思ひやる方なくて、いかなる隙にても、さりぬべき事やと思ふ心みに、女房の衣を被きて、日暮らし御所にたゝずめども、かなはぬに、すでに御格子参る程になりて、御棺の入らせ給しやらん、御簾の透りより、やはらたゝずみ寄りて、火の光ばかり、さにやとおぼえさせおはしましも、目もくれ、心もまどひて侍しほどに

（巻五　228頁）

ここで、二条の着衣が「墨染め」であることは語られすらしない。二条の、遠くからでも棺を見たいという望みは「かなひがたき」ものとして記される。こうして、後深草院が崩御すると「墨

染めの袂」であることは効力を失い、それを記述する必要性さえも薄まるといえるのではないだろうか。

このように「墨染めの袂」が失効することにより、後深草院の棺を見ることの叶わぬ二条は、「心み」、すなわち次なる代替案として女房の衣をかづくという、「墨染めの袂」の効力を消失させるような行動を起こすが、棺を直接見ることは叶わず、「火の光ばかり」が彼女の視線を捉えるのみなのである。

更にこの後、裸足になって葬送を追いかける二条が描かれる。[8]

「事なりぬ」とて御車の寄りしに、あはてて、履きたりし物もいづ方へか行きぬらん、裸足にて走り降りたるまゝにて参りしほどに〈中略〉こゝよりやとまる、〳〵と思へども、立帰べき心地もせねば、次第に参るほどに、物は履かず、足は痛くて、やはらづゝ行く程に、みな人には追ひをくれぬ

（巻五　229頁）

この裸足で葬送を追いかけるという行為はただ単に二条の衝動的な行為として描かれているのではなく、「墨染めの袂」の効力が失われ、試みとして女房の衣をかづいたことによっても望みを叶えることのできなかった二条の、最後の手段として描かれているのではないか。しかし、この「裸足」という手段も二条の望みを叶えてはいないことを確認しておきたい。

三、歌語としての「墨染めの袂」

「墨染めの袖」や「墨染めの袂」は、歌語としての性格を持つ語であり、『とはずがたり』の中にもこれらを含む和歌が三首見られる。三首ともこれまでの章で触れてきた和歌ではあるが、第三章では、この三首を中心に数首の和歌の分析を行う。

最初に「墨染め」が読み込まれる和歌は、第一章に挙げた「重ねしも」の歌である。

近きほどの御移り香も、墨染めの袂にとゞまりぬる心地して、人目あやしく目立たしければ、御形見の御小袖を墨染めの衣の下に重ぬるも、便なく悲しき物から、

重ねしも昔になりぬ恋衣いまは涙に墨染めの袖

（巻四　195頁）

「昔」として「恋衣」を、「いま」として「墨染めの袖」を挙げて、出家後の「いま」、後深草院と二条が「おなじ」墨染めの着衣であることを定義づけているのであろう。

二首目は伊勢神宮において二条が尼に宿泊を望んだところ断られた折に詠んだ「世を厭ふおなじ袂の墨染めをいかなる色と思ひ捨つらん」という和歌であり、これも先述の通り、最終的には二条の望みを叶える役割を果たす。

特筆すべきは、後深草院葬送の際に詠まれた次の二首であろう。

伏見殿の御所ざまを見まいらすれば、この春、女院の御方御隠れの折は、二御方こそ御渡りありしに、この度は女院の御方ばかり渡らせおはしますらん御心の中、いかばかりかと推し量りまいらするにも、

露消し後の御幸の悲しさに昔にかへるわが袂哉

〈中略〉御素服召さるゝよしうけたまはりしかば、昔ながらならましかば、いかに深く染めまし。後嵯峨院御隠れの折は、御所に奉公せし頃なりし上、故大納言、「思ふやうありて」とて、御素服の中に申入れしを、「いまだ幼きに、大方の栄へなき色にてあれかし」などまでうけたまはりしに、そのやがて八月に、私の色を着て侍しなど、数〳〵思ひ出でられて、

墨染の袖は染むべき色ぞなき思ひは一つ思ひなれども

（巻五　230頁）

この「露消し」の歌には「墨染め」の語は見られない。しかし、「昔にかへるわが袂哉」という下の句は、墨染めの袖を詠み込んだ、巻四の「重ねしも昔になりぬ恋衣いまは涙に墨染めの袖」と唱和する歌だと考えることはできないだろうか。確かに、表面上は三角洋一氏校注の新日本古典文学大系の訳にもあるような「法皇様の露とお消えになったご葬送の御幸を拝する悲しさに、おそば近く仕えた昔に立ち返った気持ちとなり、墨染めの色があせるほど袂を濡らすことだ」といった意味になるであろう。[9] しかし、ここまでの考察に基づき、先行研究で示されているような表の意味とは別な新たな解釈を加えることはできないだろうか。つまり、後深草院の崩御によって墨染めが「おなじ袂」としての役割を消失し、そのことによって二条の「墨染めの袂」は何の効力も有さない昔の「袂」に返ったのだという、もう一つの解釈である。

この「露消えし」詠の直後に詠まれる「墨染の」の歌では、後深草院と思いは「一つ思ひ」であるけれども「染むべき色ぞなき」と、墨染めの袂であるが故に後深草院追悼のために衣を染めることが叶わぬ二条が描かれる。

本稿のはじめにで、「小夜衣」という歌語が作品全体を通じて用いられており、巻一と巻五の詠歌とで唱和していると指摘された岩佐氏の御論については記した。

石清水八幡宮での「重ねしも」詠により後深草院と同じ「墨染め」となったことをあらわし、院の崩御後の「露消えし」詠で「昔にかへるわが袂かな」と、「おなじ袂」としての「墨染めの袂」の効果の消失を記す。更に、「墨染の」詠によって「墨染め」が担う、二条の望みを結局は叶えるという効果は完全に消滅したものとして描かれるのである。このように「墨染めの袂」との関連において三首の和歌が唱和していると考えることができよう。

おわりに

以上、『とはずがたり』における「墨染めの袂」が担う役割について考察してきた。作者は石清水八幡宮と後深草院の葬送という二つの場面によって『とはずがたり』の後半部を三部に分けて構成したと考えられる。石清水八幡宮で二条と後深草院が再会することにより、「墨染めの袂」は一度は拒みながらも結局は二条の望みを叶えるといった役割を担うが、院崩御後、その役割は消滅する。その際、歌語としての「墨染めの袂」も二首の和歌の間で唱和するかのように記されていることも注意すべきであろう。『とはずがたり』とは、このように作者の強い構成意識によって

描かれた作品なのである。

後半部における構成の転換点の一つとして石清水八幡宮が選ばれていることは、二条が村上源氏の出であることからも看過できない点である。また、「墨染めの袂」を拒んだ場所として幾度も描かれる伊勢神宮についての考察も必要である。これらは今後の課題としたい。

＊『とはずがたり』の本文は、三角洋一校注　新日本古典文学大系（岩波書店　一九九四年）に依った。

注

（1）位藤邦生「中世女流日記文学の方法―衣裳の記述について―」（『中世文学研究』一〇号　一九八四年八月）・岩佐美代子「『とはずがたり』における和歌表現―「衣」をめぐる考察―」（女流日記文学講座　第五巻『とはずがたり中世女流日記文学の世界』勉誠社　一九九〇年）等

（2）注1にある岩佐氏の御論考

（3）「『とはずがたり』における女性の装束描写―東二条院の書状による影響―」（『詞林』三九号　二〇〇六年四月）

（4）本稿では、構成された作品として『とはずがたり』を読むため、作品を書く主体としての二条を「作者」、作品の主人公としての二条を「二条」と、呼称を区別して論じる。

（5）注3に同じ

（6）たとえば、前半部の長講堂供養の場面では二条と京極殿の装束が次のように並記される。

御移徙には出だし車五両ありし、一の車の左に参る。右に京極殿。撫子の七衣、若菖蒲の表着なり。京極殿は藤の五衣なり。

（巻二　76頁）

既に述べた事ゆえ詳しくは述べないが、二条の七衣と京極殿の五衣とでは七衣の方が豪華な装束であると言える。このように、前半部において他の女性の装束が記される折には、作者は必ず二条の装束を並記してその優位性を示すのである。

（7）次田香澄氏が講談社学術文庫『とはずがたり』の解説において次のように指摘されている。

巻一、前篇の冒頭で、新春の御所に突然自己の晴着姿を現出したごとく、この巻四で、ふたたび突然自己の旅装の尼姿を登場させて後篇の書出しとする、それで十分効果をおさめており、その対比はまことに見事といってよかろう。

（8）大倉比呂志「『とはずがたり』における〈裸足〉の表象性　―〈衣〉と関連させて―」（『日記文学研究』第二集　一九九七年新典社）で、大倉氏はこの場面の裸足について以下のように述べられている。

すなわち、それは〈衣〉をつけていないのと同様であると考えねばなるまい。院の葬送の列が通過した跡を〈裸足〉で走るのであるから、それは院との共寝の擬似的状況を意味するのであり、そのように考えることによって〈裸足〉の持つ意味の内在性が浮き彫りにされるのであり、それを単に二条の異常な行動であると解釈してみたところで、いわば現象論でしかなかろう。このように二条が履物をなくして〈裸足〉で走ることを余儀なくされたと語られているとしても、院との間でもはや共寝が絶対にありえないのを認識した最後の絶叫でもあったのだ。とすれば、こうすることしか方法がなかった作者二条にとって、〈裸足〉で走ることは、今は亡き院に

対して贈った共寝願望の表象ではなかったか。

大倉氏の論の共寝願望に関しては首肯できない点もあるが、しかし、裸足で走ることを単に二条の異常な行動であると解釈してしまわないでいようとする姿勢には共感を覚える。

(9) この歌について久保田淳氏は「露と消えられたご葬送の御幸の悲しさに、昔に立ち返って紅に染まる、わが墨染の袂よ」(新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』一九九九年　小学館)と解釈されている。